また一つ歳を重ねて

毎年この時期がくると、わが人生のあゆみを考える。退職後は、こうしてレポートに綴ることも多くなった。

昨年「古希」なるものを迎え、年賀状にも体を「こき」使わず、奮闘努力していきたいと書いた。そのせいか、いろいろと病院にも通いながらも、なんとかペースを崩さず過ごしている。また一つ歳を重ねることが、今年はなんだか感慨深い。

正直なところ「古希」を超えるまで、生きられるとは思っていなかった。戦後の混乱した時代に生まれ、病弱・ひ弱な体であり、医者通いが続いた。近所の医者から「この子は 10 歳まで生きられるか？」と宣告されたと、母から何回も聞かされた。母に連れられ、名古屋駅（名駅）近くの「鉄道病院」に通ったことが、微かに記憶に残る。当時、名駅西には「闇市」がまだ残っていた。

写真は千種本町 1 丁目の「鉄道官舎」で撮ったものだ。何歳のときに撮ったのか不明であるが、数少ない貴重な写真である。成長するにつれて、だんだん背も伸びてきた。細い体であったが、頭だけは大きかった。「頭でっかち」などと言われたことも。頭は大きかったが、勉強はあまりできなかった。

わが人生を振り返ってみると、人生の曲がり角などで「運」に助けられたことが多かった。「どもり」など多くの悩みをかかえ、今でいう「いじめ」にあったことも。でも、いつも「生きる」ことを考え、歩みは遅いが前向きに生きてきたので、「運」も味方してくれたと思う。

幼き頃の病気ばかりの生活から元気に成長したこと、高校の転校から大学に入学できたこと、大学から 2 年も浪人して大学院に進学できたこと、そして名古屋市立女子短大に就職できて 35 年間の教員生活を名古屋市立大で終えたことなどだ。

写真は若き短大時代、東京の国際学会のキンチョーの報告、2014 年 2 月 22 日 2 時からの名古屋市大人文社会学部 201 教室の「最終講義」。あれから 5 年 7 ヶ月が過ぎた。早いものだ。若い元同僚が亡くなった。今でも現役時代に思いを馳せる。

一昨年の暮れ、名古屋から大阪に転居した。大学院以来の大阪暮らしだ。大阪に来て「維新政治」に怒りを感じ、「都」構想や万博・カジノについて調査し、積極的に発言している。すこし元気が出てきたようだ。平日は大阪市大の図書館に通うなど、大学院「浪人」時代のような生活である。研究面での「未熟さ」など、この歳になって恥ずかしきことも多い。歩みはのろいが、前向きにすすんでいきたい。

（2019 年 9 月 17 日）